浜益学園の学年割りについて

令和６年11月15日

１　はじめに

浜益学園は、義務教育学校として施設一体型の小中一貫教育を具現化できる校舎（現浜益中学校を改修するとともに、小学校校舎及び保育園施設を増築して、2026年（令和８年）に開校する。

「ふるさとへの誇りと愛着を持ち、夢に向かって挑戦し、未来を拓く人」を育てるために、15歳の子ども像を共有して、９年間の一貫教育を推進する。

２　義務教育学校として浜益学園が開校する意味

①現浜益小学校、浜益中学校の児童生徒の減少に伴い、小中一貫教育により少人数のメリットを生かしたきめ細やかな教育が可能となる。

②9年間を見通した一貫教育で、小中の接続がスムーズとなり安定した学校生活を目指すことが可能となる。

③学校、保護者、地域が一体となって、子ども達を見守ることができる保小の連携が可能となる。

④前期課程の複式学級は残るので、複式学級の困難な面を緩和することが可能となる。

⑤自分を表現し、対話活動を通して自己肯定感の向上につなげるため、異学年交流を位置づけた教育活動が可能となる。

⑥学校と地域との連携による浜益ならではの学校づくりを具現化することがより可能となる。

３　学年割りについて

１）　考え方

義務教育学校では、これまでの小学校、中学校の枠組みを超えた教育課程として、学校独自の教科を開設することが可能となり、小学校高学年で教科担任制を導入することが容易になった。９年間の一貫した教育の中で、どのように年齢別の集団を構成するかという学年割についても、これまでの小学校と中学校の６・３制に固定された以外の構成が可能となっている。既に令和５年度までで、北海道義務教育学校として開校した学校は２５校で、７～８割が４・３・２制と各校独自の学年制を導入して、成果をあげている事例が多数報告されている。

９年間を見通したカリキュラム編成をするために必要となる「学年段階の柔軟な区切り」を「学年ブロック」という。

2）浜益学園は３ブロック「初等部・中等部・高等部」の 4･3･2 制とする理由

・石狩モデル（厚田学園）を参考にした小中一貫教育を目指した学年割りとした。

・本校の教育課題に対応した学年割りとした。

【課題：学力の定着とふるさと教育、キャリア教育の充実】

→小学校高学年で教科担任制導入

→発達段階による目標設定

→異学年交流の実施

→【小５の壁・中１ギャップ】の解消

4　浜益学園の各ブロックでどのような教育をめざすのか

1）「初等部」（１年～４年）　学びの基礎・基本

学校生活適応と学習習慣確立のための４年間

・現在の浜益小中学校では、少人数のメリットを生かしたきめ細かな指導が、学習習慣の定着や確立を目指す。

・複式の学習形態は、複式のメリットを活かし、自分たちで学習を進めることを定着させるとともに、主体的に学ぶ姿勢も育むことを目指す。

・学校生活に慣れながら学習習慣を身につける段階では、子どもの不安を取り除き、安定した生活と学習を可能にするため、一人の先生による一貫した指導という学級担任制が効果的に機能する。

2）「中等部」（５年～７年）　学びの活用・充実

主体的な学習の定着と豊かな人間関係づくりのための３年間

・このブロックから教科担任制を導入することで、一人一人の学習のつまづきを未然に防ぎ、専門の先生の授業による興味・関心の高まりを目指す。

・教科担任制を導入することで、一人の先生が１つの学年を１時間途切れることなく指導と学習が可能となることから、この段階で急増する「理論的・抽象的な理解が必要な学習内容」の学力定着を目指す。

・このブロックは、よりよい人間関係を構築し、自尊感情や自己有用感を培う時期であることから、教科担任制を導入することで、多様な人間関係のひろがりを目指す。

3）「高等部」（８年・９年）　学びの深化・発展

進路実現と自立のための２年間

・９年間を通した教育目標のゴールとなる大切な学年ブロックである。

・応用・発展の力を育てるためには、課題の解決に必要な思考力・判断力・表現力を育成する学習が大切である。自己実現を図ることが出来る活動経験を通して、多様な人間関係を築くことで、自分らしい生き方を考えるとともに自立を目指す。

・義務教育９年間の仕上げ期間を８年生と９年生との２年間でブロックをつくることで、９年生は最上級学年として学校のリーダーとしての

自覚を持ち、８年生は９年生の姿を見て次年度の最高学年を迎える上での目標や自覚を持つことを目指す。将来への夢に向けての準備期間としての２年間でもある。

5　学校課題の解決に向けて

1）　学年ブロックを生かした異学年交流の充実

・浜益学園は各学年が少人数であるため、学年や複式学級の枠を越えて、活動する場面がある。３つの学年ブロックを設け、ブロック間の学年差を小さくすることで、ブロック内の異学年交流を充実させることができる。

・ブロック間の交流について、実践例としては、ブロックを組み合わせた縦割り清掃などによって、幅広い人間関係が生まれ、上級生が下級生に対して優しく接し、リーダーとしての自覚と高めたり、下級生が上級生に対してあこがれの気持ちをもったりする教育的な効果が期待できる。

2）　浜益学園コミュニティ・スクールを生かす学年ブロック

・「浜益ならではの教育、浜益ならではの学校づくり」という言葉が様々な場面で語られてきているように、浜益における地域と教育の関係は、きわめて大きな特色である。

・令和６年度から学校運営協議会よる（仮）浜益学園コミュニティ・スクールがスタートし、地域との連携、ふるさと学習、地域課題に対応した取組が行われている。

・学校は地域住民による多様で充実した支援をいただいている。昨年度（令和５年）からふるさと学習の小中で系統立てたカリキュラムを作成しており、発達段階に応じてブロックや学年で今後も同様の支援を頂くことで、地域の教育力がより協力に発揮されることが期待される。

※小５の壁

・小学校５年生の時期に多くの子どもが直面する学習や生活の変化に伴う困難。学習内容が一段と難しくなり、抽象的な概念や複雑な問題が増えるため子ども達がつまづきやすくなる。

・算数では割合や立体図形、国語では抽象的な漢字や長文読解が増える。自己認識の変化として、周囲との比較や自己評価が進み、劣等感を感じやすくなる。

・このような状況を踏まえ、おおむね小学校４～５年生頃に児童生徒にとっての発達上の段差（「小５の壁」といわれる場合がある）が存在しているのではないかとの指摘がなされている。

・かつては、１～６年はある程度均一な特性を持つ集団であったが現在は発達の早期化に起因して、小学校の１～４年と５・６年は大きな差異のある集団となった。

※中１ギャップ

・不登校児童数、いじめの認知件数、暴力行為の加害児童生徒数が、小学校６年生から中学校１年生になったときに生徒指導上の問題が大幅に増える。

・小学校から中学校への進学に伴う環境や学習内容の変化に適応できず、不登校や学習不振などの問題が生じる現象をしします。

・学習面での負担　学習範囲が広がり、授業スピードが速くなる。教科毎に先生が替わる。

浜益学園のカリキュラム（案）について

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
教育課程	前期課程						後期課程		
学年区分	初等部				中等部			高等部	
目　標	学校生活適応と学習習慣確立				主体的な学習の定着と豊かな人間関係づくり			進路実現と自立	
職員構成	初等ブロック（副担）				中等ブロック（副担）			高等ﾌﾞﾛｯｸ（副担）	
指導形態	学級担任制				一部教科担任制（数・英・理など）		教科担任制		
児童会・生徒会									
文化祭									
旅行的行事					宿泊学習、修学旅行を隔年実施			宿泊学習	修学旅行
儀式的行事	入学式					前期課程修了式	後期課程進級式		卒業式
運動会	１～９年生合同実施								
異学年交流	異学年交流（縦割り）活動の実施　【清掃活動等】								
総合的な学習	○家庭、地域、ＣＳと連携をとり、地域の人材や地域の資源を活用し段階的な体験学習の実施【ふるさと教育】 ○家庭、地域、ＣＳと連携をとり、発達段階にあわせた職場体験・職場訪問・上級学校訪問などの実施【キャリア教育】								
部活動					体験的に参加		部活動		

※基本的な学年割りは３ブロックとして、教育活動によって柔軟な学年割りをすることにより、目標達成を図る。